

令和3年度 生活困窮者支援研修会 実施報告

コロナ禍が長期化する中で生活が追い詰められる方々が増加・深刻化しています。若者、高齢者、障害のある人、貧困家庭、単身者、外国人など多様な方々が浮き彫りとなり、制度の谷間にいて困窮している人も少なくありません。それぞれの事情に応じた新たな支援が求められています。

CSW（コミュニティソーシャルワーク）の専門家として活躍されている中島先生を今回も講師として招き、本人を取り巻く社会状況を把握し、一人ひとりの思いやニーズに寄り添う姿勢を学ぶとともに、地域の人材や制度、サービス、住民の援助などを組み合わせた新しい仕組みなど、地域社会で支えていく「つながりづくり」の視点、連携・協働のあり方について学びました。

日時：令和3年12月3日（金） 14時～17時

場所：旭区福祉保健活動拠点 ぱれっと旭

多目的研修室

参加者：39名

（旭区内地域ケアプラザ（包括支援センター職員、地域活動交流コーディネーター職員、生活支援コーディネーター職員） 介護老人保健施設ハートケア左近山、児童家庭支援センターおおいけ、グループホームみんなの家 横浜金が谷、よこはま西部ユースプラザ他）

内容：

（1）講義

文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修氏

テーマ「コロナ禍における伴走型支援とは

～関係機関との連携、地域課題としての受け止め方～

（2）コロナ禍における生活困窮者への支援状況

- ① 旭区役所生活支援課生活困窮者担当 守職員
- ② 旭区社会福祉協議会 梅木職員



《講義について》 ※参加者アンケートから

- ・制度に当てはめず、本人のニーズに合わせる支援はどの世代、どんな状況にある当事者であっても大切だと知ることができた。
- ・短時間でコロナ禍における支援のポイントをおさえていただき、知識だけでなく連携のポイントや課題を明確にすることができた。
- ・多くの事例がありわかりやすかった。

《グループ討議について》

- ・色々な立場でありながら、職域を超えた話ができて、有意義であった。
- ・各々よくわからなかった疑問について、話し合うことで各機関の動きがよく理解できた。
- ・いろいろな立場から違った視点があるところが興味深かった。
- ・色々な立場からの意見を聞くことで支援の幅が広がるという話から、改めて、支援者同士のネットワーク・チームアプローチの大切さを学んだ。

《生活困窮者の支援状況について》

- ・連携、ネットワークづくりが大切とひしひしと感じる。
- ・社会資源、インフォーマルサービスの具体的な内容として、生活困窮者に直結したプランがあることを知り、今後非常に役立つ。
- ・必要な方々に必要な情報を届けられるよう、必要に応じて適切な機関につなげられるよう努めたい。

